
一年目の私たち

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一年目の私たち

【Nコード】

N0715W

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

明日で365日目。付き合ってから一年。早いような遅いような。とりあえずお祝いをしよう。

明日で一年目だ。364日前に私が告白して、拓也と付き合いだした。

拓也とは高校生になってから出会った。何となく挨拶くらいはする関係のまま2学期を迎え、残暑どころかまだ夏じゃなくて気温の中、私たちは同じ委員になった。

なんてことない図書委員。私も拓也も本を読まないわけじゃないけど、図書室には数えるほどしか行かない。押し付けられたようなものだ。

委員の集まりでは毎週月曜の放課後に二人で貸し出し当番をしなきゃならなくなった。

最悪ー、だるいねー、なんて言いながら当番が始まった。

週末に読んだのか？、3冊返しに来る人が最初に何人か来るけど、その人もすぐに借りて帰ってしまうから殆ど人が来なくて暇だ。

本は借りないけど数人ひたすら勉強している人もいるから雑談もできなくて、私たちはとりあえず本を読んでいた。

「ん」

「？」

差し出された紙切れに『なんかオススメの本ある？』と書いてあって、そこから私たちの筆談は始まった。

そのどこか秘密めいた会話は楽しくて、誰もいない時も私たちはシャーペン走らせた。

僅かな手持ちの本を貸し借りするのに、お互いの家を訪ねた。

そしてキスをした。

どちらからとも言えなかった。両想いだと確信してたわけじゃないし、そもそも拓也を好きなのかすらわからなかった。

だけど気づいたらキスをする雰囲気、キスをしたくなって、キスをしていた。

これが私のファーストキスで、初恋になった。

そのあと、改めて告白されたり、告白したりして、あんなことやこんなことがあった。

あつたけど、何故かあのキスした瞬間の方がよりハッキリと覚えている。

それから明日で、一年目だ。考えると何だかちよつと照れ臭い。

好き好き好きと競い合うように言い合うのは、もう半年前に終わった。今では戯れに好きーと言ってもはいはいって流される。

でもやっぱり、ふとした瞬間に、カツコイイなあって思ったり、カワイイなあとすら思ったりして、好きだなあって実感する。

だから明日はちゃんとお祝いして、デートして、誓いなんて大層なものじゃないけど来年も一緒にいようねとか、そんなことを言いたい。

あんまり女の子らしくない、素直になれなかったり憎まれ口をきいてしまう私だけど、そんな風にちよつとは乙女っぽいイベントを期待したりするのだ。

「ねえ、拓也」

「んー？」

駅前のマクドの表を向いたカウンター席に隣合って座って、私は拓也に声をかけるけど何だかつれない返事だ。

「明日だけだよ」

「うん…」

拓也の視線を追って、ガラスの向こうの表通りに目をやる。ぼいんばいんでびいなお姉さんが歩いていった。

「……………」

「ん？ ああ、悪い。なんの話だった？」

「…もういい」

「ん？ なんだよ。機嫌なおせって、な？」

頬を膨らませる私に拓也は苦笑して、ごまかすように頭を撫でてくる。

なんで私が機嫌悪いかなんてわからないくせに。ずるいやつ。とりあえずご機嫌とりしとけばいいって思ってるんだ。

「もう、ばーか」

「はいはい、悪かったよ」

あしらわれてるってわかってるのに、ごまかされてしまう単純な私。

世の中にはコトダマってものがある。言葉には力があって、ただ思っただけじゃなく声に出すことで力を持つって考え方。

「ねえ、私のこと好き？」

「ばか、何言ってるんだよ」

「好きって言っつてよ」

「…好きだ。これでいいだろ？ もう行こうぜ」

外だからか恥ずかしがりながらも、拓也はちゃんと言ってくれた。好きだって言われただけで、ちよつと幸せな気分になる。だからコトダメってあると思う。

だからね、明日は特別な日にしたいの。大好きだよって伝えて、もつともつと拓也と心を近づけたいの。

こんなこと思うの、私の柄じゃないかな。でもほんとにね、拓也に好きって言う度に、心から拓也を好きになっていつてるんだよ。拓也にはわかんないかも知れないけどね。

「ふふ、私も好きだよっ」

私はトレーを手に立ち上がる拓也の腕に寄り添いながら、そつと気持ち伝えた。

「はいはい」

冗談みたいに言ってるけどさ、ほんと結構ドキドキしてるんだよ？

拓也は余裕に流しちゃうから、わかんないんだろうっけどさ。

でも、そんな苦笑気味の、余裕な顔も声も好きだから、敵わないなあと思うっちゃうんだよね。

とりあえず明日のデートの約束は取り付けたけど、拓也は用があるからなんて言って途中で帰った。

私も明日のプレゼントとケーキでも買うつもりだったから、ちょっといいっちゃいいんだけど、なんかやだ。

デートを途中でやめるなんてどんな用よ。気になる。浮気じゃないでしょうね。

そりゃ、デートって言っても学校帰りにぶらぶらするだけで毎日のようにしてるし、ゲームやるからって帰ったこともあるけどさ。明日で一年目なのにつれない。

どうせ、拓也は明日が一年目だなんて覚えてないんだろうな。

ま、いいや。朴念仁めと思うけど、多少そういつとこあった方が浮気の心配いらないしね。

明日は私がちゃんと準備して、お祝いしようって言えば拓也ものってくれるでしょ。…えへへ。

明日が楽しみでるんるん気分なまま、私はお店に入る。

「すみません、予約していた木山ですけど」

「ああ、はいはい。できてますよ、ほい、確認して」

「はい」

シルバーアクセスのこの店はお手頃な値段で、名前入れも安くやってくれる。

明日のために予約しておいたのは、ペアのリング。名前をいれてもらって、今日できた。

「はい、ありがとうございます」

清算して店を出る。プレゼント用の簡単なラッピングをもらった。拓也は喜んでくれるだろうか。

拓也はあんまりアクセサリは好きじゃない。ちゃらちゃらするのは男らしくない、というよりつけたりはずしたりメンドイってタイプ。

でも、やっぱり特別な日には特別な意味をこめて、特別なモノをプレゼントしたい。それにはやっぱり指輪でしょ。

それからケーキ屋に行く。

ホール買いたいなあとは思っけど、二人で食べ切れないし、好みも違うから梨のタルトとチョコレートケーキのカットを一つずつ買った。

最近の私はタルトが好き。私は結構好みがころころ変わる。ケーキだけでも苺ショートこそ至高と思ったり、やっぱりチーズケーキとか言ったり、通はレアチーズケーキと悦に入ったりしてた。それに対して拓也は小さい時からチョコレートケーキ一筋らしい。

保守的と思わないでもないけど、そういう一途なところも好きだ。

鼻歌なんか歌いながら家に帰り、箱に名前を書いて冷蔵庫にケーキを入れた。

明日が楽しみだ。

「今日はうち来てよ」
「ん？ え？ なんで？」

サプライズ的な意味もこめて昨日はデートとしか行ってないので、普通にぶらぶらするでも思ってたのか普通に聞き返された。

「え、なんでって言うか……私の部屋で自宅デートじゃダメ？」
「ダメってわけじゃないけど……わーったよ。んじゃ一回家帰るから先帰ってる」

「え？」
「着替えてから行くから」
「わ、わかった」

拓也の家にはちよいちよい行ってたけど、私の部屋にはめったに招かない。だから不思議がられたんだろうけど、なんで一回帰るの？ んー……私の部屋だし、着替える必要ないし……ま、いいか。

「んじゃ、待ってるね」

そのまま別れて帰宅。昨日のうちに片付けはしてある。ゴムもある。万全だ。

あ、そうだ。折角時間が出来たんだからシャワー浴びておこう。拓也が私服なら私も私服にならなきゃ。

30分かけて身支度を済ませるとちょうどピンポンとドアベルがなった。

「はいはい、いらっしやい、拓也」

「おう…後で出かけるの？」

「え？ なんで？」

「家ではいつもジャージだったじゃん」

「いや、拓也来るのにわざわざジャージになるわけないじゃん。制服のままなのも不自然だしね」

「ふうん」

「とりあえずあがつといて。ジュース持ってくから」

「おう」

確かに家着にしてはちょっと不自然なくらいにオシャレしたけど、気づくとは。……てゆうか、気づいたなら褒めなさいよ、馬鹿。新しい服なのに。

……まあ仕方ないか、拓也だもんね。折角の記念日に入そまげても仕方ない。私は気を取り直して、ジュースをいれてお盆にのせて自室に向かう。

「開けてー」

「はいよ」

ドアを開けてもらって部屋に入る。

「お待たせ」

「ん。そういえばさ」

「んー？ なに？」

「…その服、見たことないけど、似合ってるぞ」
「そ、そう。うん、新しいのなんだ」

褒めてくれた！ やばい。めっちゃ嬉しいつ。拓也がそんな気のきいたこというのめっちゃ久しぶり！ 思わず言っちゃうくらい似合ってた！？ やった、嬉しいな！。えへへへへへ。

私はにやけそうなのを堪えて微笑みながら、お盆を部屋の丸テーブルに置いて机を挟んで拓也の向かいに座る。

「ねえ拓也」

「なんだ？」

「今日、何の日か覚えてる？」

「は、お前覚えてたの？」

「え？」

「え？」

…覚えてたの？

ぱちぱち瞬きしながらしばらく見つめ合い、確認のため口を開く。

「付き合って一年目って、覚えてた？」

「てかお前が覚えてる方が意外だったの。ずぼらな性格なのに」

「ずぼらと記憶力は関係ないでしょ！」

怒ったように言いながら、覚えていてくれたという事実に関がゆるむのが抑えられない。

期待してなかっただけに覚えていてくれたなんてめちゃくちゃ嬉しい！

「あのさ、私、実はケーキとプレゼント用意してるんだ。一緒にお

祝いしてくれる？」

「まじかよ」

「…え、い、嫌なわけ？」

「そうじゃなくて…俺も用意してんだけど。プレゼントはともかくケーキダブってんじゃん」

「え！？ 用意、してくれたの？」

「…悪いかよ。お前が忘れてるだろうから仕方なくだからな」

「う…嬉しいよ。悪くなんかない。覚えてくれて嬉しい…し、プレゼントとか、マジ嬉しい」

素直に嬉しいと言うのは少し照れたけど、今日という日にあえて意地をはるのもどうかと思ったし、照れながらも拓也も言ってくれてるのだから、素直になることにした。

「私、ケーキとっってくる！」

プレゼントしてからと思って目立つケーキ箱はまだ冷蔵庫だ。私は慌てて部屋を出てケーキを手に戻った。

「お待たせ！」

「だから、俺のあんだからいいつつの。家族で食べよ」

「いいの！ 二つくらい食べられるでしょ」

「俺はいいけど…お前ダイエツトは？」

「今日はお休み！ 明日から！」

「はいはい。何買ったんだ？」

「チョコと梨タルト」

「くそ、モロかぶった。俺は梨タルトとチーズケーキ」

私がケーキを出すと拓也が舌打ちしながら鞆からケーキ箱を出した。同じお店のだった。

「もしかして今日買った？」

「いや、家に呼ぶつもりだったから昨日だ。別れてすぐケーキ屋行った」

「なるほど。すれ違ってたか」

一歩間違えばケーキ屋で顔を合わせてたわけだ。危ない危ない。

……それはそれで問題ないか。

「つて、あれ？ 拓也何でチョコレートケーキ買ってないの？」

「…お前の好みはころころ変わってわかりにくいんだよ」

ん？ んん？ ……つまり、私の好みそうなの二つ買って余った方食べるつもりだったってこと？

うわー！ 拓也私のことめっちゃくちゃ好きじゃん！ 知ってたけど！ 知ってたけど！ 知ってたけどー！！！！

「ありがと。なら拓也は私の買ったの食べて。私は拓也の二つもらうから」

「おう」

「いただきます。お、梨タルトうまつ。そいや、タルトはまってるって言ったっけ？」

「いや。ただ限定だったし。お前限定に弱いだろ」

「う…まあ、ね」

「ん、タルトも結構うまいな」

「でしょ？」

「なんでお前が自慢げなんだよ」

ケーキ食べて、いよいよプレゼントタイムです！

「はい拓也、プレゼントです」

「おう。俺も用意してるぞ。…ん？」

「あ…」

ちよ、お……プレゼントの包装紙同じとか、どんだけ被ってるの。

「……ちなみにブツは？」

「ネックレス」

「セーフ！ 私指輪だあ」

ほ。これがダブってたらさすがに笑えない。

私と同時に拓也もほっとしたように笑う。大きさ違うから指輪じゃないとは思ったけど、袋同じだしマジびびった。

「同じ店とか、どんだけ田舎だっつの、なあ」

「だよねえ」

大都会ではないけど、アクセサリー買うにしてもいくらでも選択肢ある町でなんて被り率だ。ある意味気があうのか。

「ほれ、プレゼント。大事にしるよ」

「ありがとー」

チャームは二つをくつつけるとハート模様になるやつだ。赤いちっちゃい石がついてる。シンプルだけど悪くない。

「はい、私からはこれね」

「指輪ねー…ふーん、悪くないな」

「でしょ。ちゃんと左手薬指につけてよね」

「だが断る」

「へ？」

「こーやって、ネックレスにプラスしよう。名前入りだしちょうどいい」

「ちょっとちょっと!?! 何でつけないのよ!?!」

チェーンに通してネックレスのチャームにしようとする拓也に全力で突っ込む。

「指にはめるとうざくね？」

「酷い！」

拓也とお揃いの指輪にしたかったのに！ 恋人なんだからペアリングが基本なのに！ むしろずっと憧れてたのに！

言いたい文句はたくさんあったけど、拓也がどうも思っていないのに私だけ指輪指輪とこだわってるとは、何だか言いづらい。

「……………」

「…わかったわかった。つけりゃいいんだろっが」

「……………ほんとに？」

じつと見てると拓也は視線を泳がせてから、指輪をはずして今度こそ指につけた。もちろん、左手薬指だ。

「でも、これって結婚専用じゃねえの？」

「そんなことないよ。ステディがいますって証なんだから」

「ステディって…お前はいつの人間だよ」

「うっさい。さて、私も…」

「ストップ」

「え？ なに？」

「俺はつけるけど、お前は首な」
「は？」

拓也は私の指輪をとると、私のネックレスにプラスした。

「つけるぞ」

つけられた。つけてもらうのは初めてで悪くない……けどちょっと待って。何で？ 私もつけなきゃペアの意味ないじゃん？

「なに？ なんなの？」

「何だよ。俺のプレゼント気にいらないか？」

「き、気にいらなくはないけど……いや、やっぱりおかしい。ちやんと理由がなきゃ納得できない」

「……お前さ、空しくねえの？」

「え？」

急に真顔になった拓也にびっくりする。

「左手薬指につける初めての指輪が自分で買ったものとか、空しくねえの？」

「は……は？ いや、別に」

てか、そんな気にするほどでもないし。恋人でつけるのには憧れたけど、薬指に指輪自体はたまにはめてるし。そこしかサイズ合わないのがあるんだよね。

「とにかく、薬指は空けとけ。……そのうち、俺が買ってやるから」

「え！？ マジで！？ いつー！？」

「……大人になったらな」

「……………はあ？」

ど、ど、どという意味？

1. そのうちの変化形で特に意味はない。単なるごまかし。
2. そのまま。大人になっても付き合ってる予定で、結婚的なアシをくれる。

普通は1だけど……………それだと、私が今指輪をするのをとめるのはおかしい。つまり……………2？

「た、拓也…マジで言ってる？」

「…何だよその反応は。嫌なのかよ」

「う、ううん！ 嫌じゃない！」

「…なら、指輪つけんなよ」

「つけないつけない！ 絶対つけない！」

もう薬指しか合わない指輪は捨てる！ 絶対つけない！

「……………ふふふふ」

「気色悪い笑い方すんな」

「またまた、そんな言い方しちゃってー。私のこと大好きなくせに」

ふん、と鼻をならしてそっぽを向いた拓也に私は微笑む。

照れて黙っちゃって、可愛いんだ。

これが絶対の約束になる保障なんてないけど、それでも私といつまでも一緒にいたいって思ってくれていた。

それが私はとても嬉しくて、拓也を好きになってよかったと心から思った。拓也と恋人になれた私は、きつと世界一幸せだ。

来年も再来年もずっと一緒にいれるようにと願いをこめて、私は言う。

「私も拓也が大好きだよ」

「はいはい」

拓也はちょっとだけ笑った。

(後書き)

読んでくれてありがとうございます。

思い込み激しくて隠し事できないタイプなのに隠せてると思ってる女の子と、ぶっきらぼうで一途な男の子の話だと思っ。ノリで書いたから微妙にキャラができてない。

ちなみに『びい』は美人の意味。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0715w/>

一年目の私たち

2011年8月24日08時15分発行